

## ペテロ第一の手紙2章9節 「王なる祭司」

### 1A 選ばれた種族

1B 愛された者

2B 仕える者

### 2A 祭司の王国

1B 礼拝による統治

2B 執り成しの民

### 3A 聖なる国民

1B むなしい生き方の贖い

2B 善の行い

## 本文

ペテロの手紙第一 2 章を開いてください。午後礼拝で、2 章全体を一節ずつ見ていきますが、今朝は、2 章 9 節に注目します。「しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民です。それは、あなたがたを闇の中から、ご自分の驚くべき光の中に召してくださいました方の榮譽を、あなたがたが告げ知らせるためです。」

ペテロがこの第一の手紙を書いたのは、アジア、今のトルコの教会の人々に、迫害が迫ってきている中であって、それでも喜びと神の栄光の中に留まっているように励ましているものです。パウロがローマで皇帝ネロによって殉教した前後に、同じくローマにいるペテロが書いています。ユダヤ人に対する使徒らしく、ペテロは、イスラエルの民に与えられた神の約束を、イエス・キリストにあって異邦人にも与えられていることを教えています。それが、「**選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民**」であるということです。

ところで、みなさんは、皇族の方々に直接、触れたことはあるでしょうか？今は 30 歳ぐらいの若者で、かつて大学に在学中に、皇族の方々もそこに通っているという人たちが、いろいろ話してくれたことがあります。そのご様子がニュースになる時に話題になるのは、学校に通うのに他の学生たちと同じように電車通勤を望んでいるというものだとか。その他、ファミレスのようなところで会合があっても、そこに出席することを望まれたりします。普通であることを願うというものです。ある人は、皇族の人だとは気づかずに、家に誘われていたら皇居だった！なんていうこともあります。このような傾向は、英国の王室でもあり、ウィリアム王子は路上で、ホームレスの人たちといっしょに寝るといふことも行なわれたと聞きます。ヨルダンの国王アブドラ二世は、タクシーの運転手に扮して、そのお客さんの言っている情報に耳をすました、と彼の自叙伝で読みました。

一般市民の多くは、より高い地位へ上がることを望み、より多くの富を得ることを望みますが、本当に高い地位にいて、あまりにも多くの資産があると、むしろそのような富や地位のしがらみから自由にされて、自分のしたいこと、またはしなければいけない使命に対して忠実になることができます。これが、ここペテロが、迫害下にあるキリスト者に対して、大いなる恵みにあずかっていることを教えているゆえんです。2章では、神を知らない異邦人の間で、立派にふるまいなさいと勧めています。人の立てた制度に従いなさいと教えます。奴隷は、尊敬の心をこめて、主人に従いなさいと言っています。しかし、そのようなことができるのは、大いなる恵みを神から受けているからなのだということです。

この箇所は、主がエジプトからイスラエルの民を連れ出し、シナイ山で約束してくださったことに基づきます。「出 19:5-6 今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあつて、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。」イスラエルに与えられた神の選びが、キリストにあつて異邦人にも与えてくださっています。

## 1A 選ばれた種族

### 1B 愛された者

まず、「**選ばれた種族**」について、考えてみましょう。神のイスラエルに対する愛の言葉があります。「申 7:7-8 【主】があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。しかし、【主】があなたがたを愛されたから、またあなたがたの父祖たちに誓った誓いを守られたから、【主】は力強い御手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王ファラオの手からあなたを贖い出されたのである。」

選ばれたというのは、愛されて、恋慕われたからです。しかも、優れて、力があるから選ばれているのではなく、むしろ弱く、小さき者に対して主が、一方的に愛して選ばれました。選びについて、私たちはしばしば誤った見方をします。優れているから選ばれているのだ、と。いいえ、神の選びとしてヤコブを思い出してください、彼は生まれる前から「わたしはヤコブを愛した。(マラキ 1:2)」と言われ、それで選ばれました。ヤコブの行ないは、お世辞にも優れているとは言えませんが、それなのに神の選びの確かさが彼の生涯を通して表れました。私たちが神の召し、その聖い生活を歩み、迫害するような困難な中でも善を行うことのできる源泉と力は、神の一方的な愛と憐れみに基づく、選びの召命にあります。

### 2B 仕える者

そして選ばれたというのは、自分が何かをしたいという願いではなく、ただ主が語られているとい

うだけで行う、しもべの姿を示しています。イザヤ書において、イスラエルも、またキリストご自身も、「主のしもべ」と呼ばれています。

私たちがいかに、自分の権利と呼ばれているものから自由にされているかが、重要です。私たちは、「これは罪ではないから、別にやったっていいかん！」と退けてしまったら、この世において証しを立てる機会を自ら失ってしまいます。選ばれた者は、自分に与えられている当たり前の権利を、使命や召命を果たすために、自ら進んで捨てるのです。

パウロは、自分があらゆる人に福音を宣べ伝える姿勢について、次のように語りました。長い引用ですが、第一コリント 9 章 19-22 節です。「19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。21 律法を持たない人たちには——私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。22 弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。」

パウロは、福音宣教に召され、選ばれました。自分は、キリストにあつてだれに対しても、自由です。しかし、主に与えられた愛のゆえに、全ての人に対してすべてになりました。こうして、あらゆる人のしもべとなったのです。

## **2A 祭司の王国**

### **1B 礼拝による統治**

そして、「**王である祭司**」について考えたいと思います。これは、「祭司の王国」とも訳すことができます。祭司とは神と人とを仲介する人です。祭司は、人々のために神に近づきます。主を礼拝して、主に仕えることが彼らの第一の務めです。そうして、イスラエルの人々のために祈り、執り成しをします。もう一つは、神の恵み、祝福、そのすばらしさを、人々の前に分かち合います。人々が、このようにして神の支配を、祭司たちを通して知っていくのです。

これら祭司たちが集まって、その務めを果たすことによって、神があがめられ、神の支配が広がっていくのを、「祭司の王国」といいます。今、私たちが、キリストにあつて神の祭司であり、私たちが祭司として神に仕えていく時に、御霊によって人々に神の支配が広がります。そして、イエス様が再臨されて神の国を地上に立てられたら、キリストと共にすべ治めることになります。

ですから、私たちの第一の務めは、主のところに来ることです。礼拝することです。「2:4-5 **主の**

もとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。」主のもとに行き、この方にあつて私たち自身が築き上げられていくということです。

そして第二に、人々に仕えます。仕えるといっても、主イエスにあつて、仕えます。主人に仕える時は、主イエスにあつて従うので、主人を通してイエス様に仕えるといって過言ではありません。そこで、主人は、自分が従っているのを見て、そこにキリストを見るのです。それで、キリストの支配が広がるのです。自分の権利をふりかざしたら、自分自身を主人に見せることになるかもしれませんが、自分からキリストは見えなくなります。

しかし、自分が仕えて、キリストが主であることが見えたら、もしかしたら彼自身がキリストの前で、ひれ伏さなければいけないと思うかもしれません。ダニエルがネブカドネツアルに長いこと仕えて、ついに王がダニエルの神をほめたたえるに至りました。ダニエルは、日に三度、エルサレムに向かって祈っていた人です。主に仕え、そして王に仕えて主の証しを立てて、それで人々を、イエス様に捕えられるようにするのです。

## 2B 執り成しの民

そして祭司の務めには、執り成すという大切な働きがあります。王の前に出て、他の人のために懇願することです。ヨセフの前で、ユダがベニヤミンのことで執り成したのを思い出してください。ベニヤミンの穀物の袋に、ヨセフの杯がみつかったので、ベニヤミンが生涯、奴隷にならなければいけないとヨセフが言いましたが、ユダが自分が保証人となったと言って、ベニヤミンを父の下に返してほしいと懇願したのです。

そのことによって、ベニヤミンが解放されたように、主ご自身が、私たちの負債のために身代わりになって死なれたゆえに、私たちも罪から解放されました。これが執り成しのなすわざであり、人々が負い目を持っている中で、その人のために主の前に出ていくことです。罪の中にいる人について、あの人は罪の中にいるということは、こちらは何の苦労もなくできます。けれども、多くの労力を費やすのは、その人が悪から悔い改めて、神に立ち返るように、神に祈り求めることです。そこには、神から与えられた愛がなければ、忍耐がなければ、到底、行うことはできません。

私たちは、また、上に立てられている人々について、批判をしたり、不満を鳴らすことは、いとも簡単にできます。クリスチャンの中でも、世の政治家を批判する時に、預言者の働きをしているのだという人がいますが、あまりにも陳腐な預言者だと思います。批判をしたり、悪くいうことは、世の人、神を知らない人でもいくらでもできます。

できないのは、それでも主の前に出て、その人のために祈ることです。そこには、愛の労苦がともなうのです。パウロが、勧めました。「I テモ 2:1-3 そこで、私は何よりもまず勧めます。すべての人のために、王たちと高い地位にあるすべての人のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい。それは、私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。そのような祈りは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることです。」

### 3A 聖なる国民

そして、ペテロは、「**聖なる国民**」と言っています。あらゆる国々がある中で、その中で神の属する者として、別たれている存在です。神の命令のみに従う者たちです。この世の国々がどのようなことを言っているか、神の教えのみに縛られています。周りがどうであっても全く影響されず、世から見れば、特異な動きのように見えるようなこともあるのです。イスラエルの民は、汚れた動物と、きよい動物を教えられ、汚れた動物を避けて食べることによって、彼らが聖なる民であることを示さなければいけませんでした。

#### 1B むなしい生き方の贖い

1 章で、「1:18-19 ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」と学びました。先祖のむなしい生き方から、イエス様の流された血によって清められ、そこから離れているのです。

私たちキリスト者が、避けるべき生き方とは何でしょうか？ 4 章に具体的に出てきます。「4:3-4 あなたがたは異邦人たちがしたいと思っていることを行い、好色、欲望、泥酔、遊興、宴会騒ぎ、律法に反する偶像礼拝などにふけりましたが、それは過ぎ去った時で十分です。異邦人たちは、あなたがたと一緒に、度を越した同じ放蕩に走らないので不審に思い、中傷しますが、」とあります。他の人々がしてきたこと、今も当たり前に行っていることで、私たちは行わないことがあるのです。それで、不審に思われ、中傷されることがあっても、主に裁きを任せるのです。

#### 2B 善の行い

そして、聖なる国民としての生き方は、善を行うことです。「2:20 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。」善を行うことが勧められています。そして、それは自分に悪を働く者にさえ、及びます。悪に対して悪で返すのではなく、善で返します。

ダビデがちょうど、サウルが自分の隠れている洞窟に入ってきて、彼の衣のすそを切り取って、それで心を痛めました。そして、悪に対して仕返しをしない、油注がれた者に手を出すことはできないとしたのです。私たちの心の痛み、汚れていると感じていること、すなわち復讐は、世におい

てはあまりにも当たり前です。それをしないことのほうが、不思議に思われます。かえって、弱いとみなされます。しかし、そうした柔和さ、悪に対して善に返すということは、聖なる国民としてふさわしいふるまいなのです。

このようにして、私たちが選ばれた種族、王である祭司、そして聖なる国民であることが分かりました。こうして、困難な中であっても、知恵が与えられ、かえって主の力強い証しを立てることができるのです。